

# 郷土の

# 偉人

結城健三は、明治 33 年、父法順・母たつの三男として宮内に生まれました。宮内小学校高等科の頃から文学に興味を持ち、諸雑誌に俳句・短歌・詩・短文を投稿、大正 8 年までに 336 編が入選、「少年倶楽部」に投書家の勇将として写真を掲載されたほどでした。

大正 8 年に東京に就職し、北原白秋選の「日日歌壇」に短歌の投稿をはじめて抜群の成績をあげました。また、同 10 年山形新聞元旦号短歌欄に 18 首入選、翌 11 年元旦号にも 23 首が入選しています。

大正 11 年、山形県にもどり、鶴岡、酒田、山形で新聞記者をしながら短歌を詠み続けました。しかし、経済的には恵まれず、昭和 10 年頃までは貧窮の歌を作り続けました。昭和 3 年には「極貧にみて歌を思ふ心ほど有難きはなし」と詞書して「極貧再来」17 首を発表しています。

明日いち日<sup>にちた</sup>足れりと思う<sup>やす</sup>安けさや 米を抱えて夜空を仰ぐ

昭和 11 年、山形県庁に勤め、ようやく人並みの生活となりました。12 年 NHK ラジオの短歌選評を始め、また、「山形県歌人協会」をつくりました。

昭和 22 年、金雀枝短歌会をつくり、歌誌「えにしだ」を発行して県内歌人たちを指導しました。「えにしだ」は今も続いていて、平成 23 年 5 月に 771 号を数えています。

昭和 25 年、健三は山形新聞の「郷土百人」のひとりに選ばれました。同 38 年、第 8 回斎藤茂吉文化賞を受賞、同 39 年から山形新聞の「やましん歌壇」の選者を 11 年間続けて県内短歌界の発展に尽くしました。

同 46 年、ふるさと宮内の熊野大社境内に歌碑が建てられました。

宮ばしらのかげより我の稚<sup>ちご</sup>児<sup>まい</sup>舞を 見てみたまいし母が恋しき  
と亡き母への想いを刻んでいます。



健三の歌碑はこのほかに、村山市東沢公園、鶴岡市の金峯山と湯殿山参道、山形市の沼の辺と大野目にも建てられていて、健三の県内における偉大さが偲ばれます。

健三は昭和 52 年勲五等瑞宝章を受章、平成 7 年 95 歳で亡くなりました。

文・須崎寛二

平成 23 年 8 月 1 日号 市報なんよう掲載

## 結城 健三

